

◎ 第5章

グループ5

プレゼンテーション

小川和久
加藤晋
北村友人
木林和彦
白石真澄
城山英明
谷川武
永田潤子
森本章倫
蓮花一己

代表パネリスト

北村友人

東京大学大学院
教育学研究科
学校教育高度化専攻准教授



グループ1と2は理念的なお話、グループ3は具体策、グループ4は社会のあり方と、それぞれ多様なご報告をされました。グループ5はそれを踏まえようと思つて議論していたわけではないのですが、議論の中で自然とそういう形となったように感じています。われわれIATSSの会員はIATSSという場を利用して何をしていくべきなのか、ということにかなりフォーカスして議論した次第です。

まずメンバーが集まって、IATSS（国際交通安全学会）の「安全」についてとらえ直しました。「安心」と「安全」という言葉がありますが、2つはそもそももまったく異なるものなのか。安心とはどのようなようにして築くことができるのか。安全と安心について再定義しなければいけないというところから議論を始めました。さらに、IATSSは学際的活動を標

IATSSの設立趣旨の再定義

- 優れた場を提供する(IATSS)
- 場を活用する(IATSS会員)

理想

- 安全(safety)に加えて、risk managementの視点に配慮した**安心(security)**が重要である。理想とは安心を得るために**安全を積み重ねた状態**

交通社会

- **多様な利用者**への配慮(交通弱者への対応)した、交通空間の再配分・分離と社会システムの改善

実現

- 様々な制約下で、社会のニーズをとらえた**研究成果が社会システム**に取り込まれ、現時点より改善すること
- 国際的な**比較研究**などを通してレファレンスを増やすとともに、国際社会に情報を発信する

榜していますが、果たしてIATSSは知の新領域を切り開いているのか。そして国際的に共創の関係を築けているのか。IATSSの学際性を通じた活動と社会実装が知の新領域を切り開き、国際的な共創関係をつくっているのかどうか、そこを問い直そうと議論を始めました。

IATSSは非常に優れた場をわれわれに提供してくださっていると同時に、われわれ会員がこの場をきちんと活用できているのか、また活用していかなければいけないということを非常に強く感じました。そして、そうした優れた場を活用するには「理想」を持つことが大切だと考え、まずは「理想」について語ろうではないかと考え、理想的な「安全」と「安心」のあり方について議論しました。

理想というのは、安心を得るために安全が積み

重なっている状態です。これが非常に幸せな社会のあり方でしょうし、われわれが理想とする社会のあり方ですが、実はいまの交通社会は利用者が非常に多様です。これからの交通社会でも、多様な利用者というのがさらに広まっていくことが予測されます。その中で、とくに交通弱者と呼ばれる方々に対して配慮した交通空間の再配分や分離、社会システムの改善を考えなければいけないのではないかと思います。それを実現していくためには、さまざまな制約はあっても、社会のニーズをとらえた研究成果を社会システムに取り込み、いまよりも改善していけるように、われわれが国際的にも通用性を持った研究を発表・発信していくことが大事です。われわれは「Reference (レファレンス)」という言葉を使いましたが、国際的な比較研究等を皆が参照できるように、国際社会への貢献のひとつとしてこれを行っていく必要があるのではないかとということも議論しました。

こうした議論を踏まえた上で、グループ5では「Transdisciplinary (トランスディシプリナリー)」なあり方について議論しました。IATSSのトランスディシプリナリーな活動を活発化させることで、協働的なプロセスを通じた先進事例づくりを推進しようということです。グループ2の発表で土井先生が「ニーズ主導」という言葉を使われましたが、トランスディシプリナリーはまさにニーズ主導です。あるいはトランスディシプリナリーという考え方においては、日常生活の中にあるさまざまな問題から出発することが非常に大切になっ

共通認識

・IATSSのTransdisciplinaryな活動を活発化させ、**協働プロセス**による先進事例づくりを推進する。

目的

安全

・ **安全(safety)の再定義**づけ、リスク情報開示と評価システムの構築、安全教育

対象

交通弱者

・ **交通事故の被害**に遭いやすかったり、**事故要因**を無意識の内に誘発してしまう人々（例：児童・高齢者・睡眠障害などの病気を抱える人 etc.）

・ **移動を制約**されている人々（例：歩行困難や視覚障害などを抱える人；地域格差による制約を受けている人 etc.）

実践

交通社会

・ IATSSとして社会実装の役割強化

・ 関係省庁、マスコミ、被害者の会など **多様な関連機関や当事者との連携**

ハード(=交通手段・環境の改良・整備)とソフト(=社会の認知と理解)の両面

てきます。

これまでのマルチディスプレイプリナリーやインターフェイスプリナリーという言葉は、あくまで学問領域が相互に協力し合ったり、乗り入れ合ったりすることでしたが、トランスディスプレイプリナリーではまず日常生活の問題から出発し、研究していく中で研究者や専門家だけではなく一般の人々も含めてさまざまな人たちが議論の中に入ります。それがトランスディスプレイプリナリーなプロセスということになります。

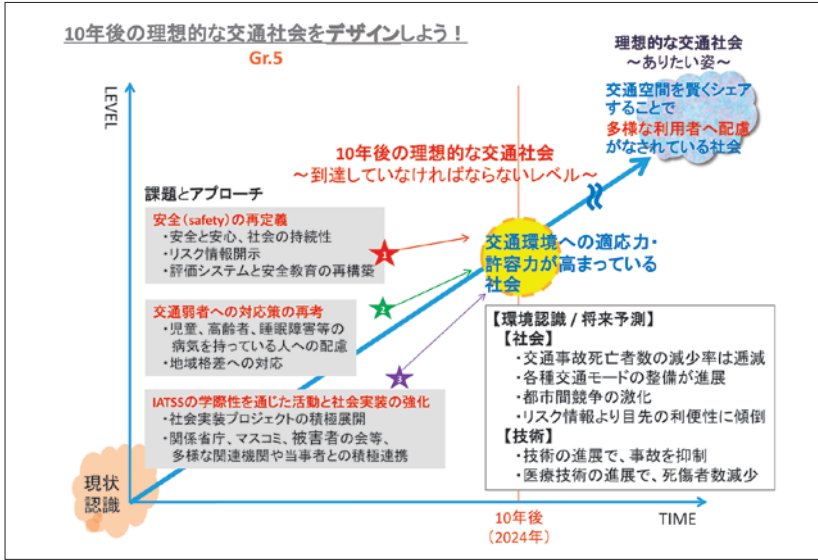
こういう中で私たちは安全の再定義をもう一度すべきですが、再定義をするにあたって実はまだ十分に情報を得ていません。例えば、さまざまなリスク情報が十分に開示されていない面もあるのではないのでしょうか。また、いまはさまざまな領域で評価が大事なものとされています。政策をつくるにあたって、エビデンスに基づく政策

という言葉で評価していくことが重要視されています。ですから評価システムの構築も大事でしょう。また、安全を定義するだけでなく、それを社会に広めていく安全教育も大事ではないでしょうか。

交通弱者という対象を考えると、交通事故の被害に遭いやすい幼児、児童、高齢者、あるいは事故要因を無意識のうちに誘発してしまう人々（例えば、睡眠障害等の病気を抱える人）がいます。さらには歩行困難や視覚障害といった身体的な障害のほかに、公共交通機関が無いために地域格差による移動の制約を受けている人たちもいます。

トランスデザインプリナリーな観点から、日常の中にある問題から出発しようというときに、私たちはまずこうした方々が置かれている状況に関心を向けるべきです。それを交通社会で実践していくにあたって、IATSSはこれまでも社会実装を非常に大事にしてきましたが、それを強化していくことです。それと同時に、すでにこの40年間で多くの関係省庁、マスコミ、他分野の方々とはさまざまな意見を交換してきましたが、これまで以上に多様な方々、交通事故等の被害者の会など関連する当事者の方々と連携していくことが大事です。そして、ハードとソフトのバランスを取っていくことです。

理想的な交通社会は交通空間を賢くシェアすることで多様な利用者へ配慮できる社会であり、そのためには10年後に交通環境への適応力や許容力が高まっていることが大事であると

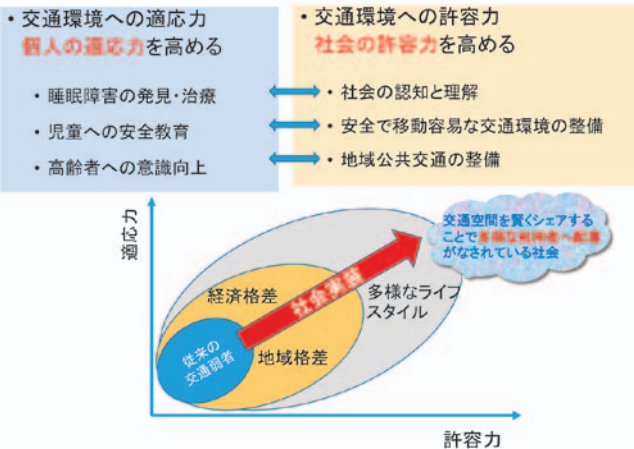


いうことを、われわれは議論しました。上図の右
下は、こういった議論をするにあたって、われわ
れがどのような環境認識や将来予測を持っている
かということの一部です。

とくに10年後、そしてその先の交通空間を賢く
シェアすることが、交通弱者の方々にも目を向けた
ときには非常に大事になると思いますが、これを
もう少し具体的に考えてみると、交通弱者対策か
ら多様な利用者への配慮ということがステップと
して考えられると思います。

その際にキーワードとなるのが、交通環境への
適応力と許容力です。個人の適応力を高めていく
ことが大切ですが、例えば睡眠障害に関しては本
人が気づかずにかかっていることもあるので、早
期に発見して治療するシステムが大切です、こ
ういった問題について社会の側も認知と理解を深
めることも重要です。ただし、ここで非常に難し

交通弱者対策から、多様な利用者への配慮へ



い問題となるのが社会の多様性です。睡眠障害の方は交通弱者でもありますが、実は交通加害者にもなり得ます。事故の原因をつくることによつて、被害者になる場合も加害者になる場合もあります。これは一概にどちらが悪い、誰が悪いとは言えません。誰が悪いかを追及する以前に、そもそも個人の適応力が高まっているのか、社会の許容力を高める方向で社会基盤整備等が進んでいるのかということを議論しなければいけないと思います。

個人の適応力という意味では、児童や高齢者についても、社会の側との関係性の中で考えていくことが必要だと思います。従来の交通弱者だけにとどまらず、地域格差や経済格差の問題も含めて、さらにはライフスタイルが多様化していく中で、さまざまな研究をIATSS会員としてわれわれが積み上げ、それを社会実装して、理想とす

るのは最終的に交通空間を賢くシェアできる社会を構築することです。

中でも、この「賢く」というのが大切だと思います。一刀両断的に誰が良い、誰が悪いと言うのは、あまり賢い行為ではないと思います。何が必要とされていて、どこで何ができるのかを賢くシェアする中で、多様な利用者へ配慮できる社会を実現していくことが重要ではないかと思います。

交通弱者等も含めた交通利用者の多様性も、それを受け入れる社会の側の多様性も必要だと思います。それから、この社会にある資源等を賢くシェアしていくこと。そのためにも、個人の適応力と社会の許容力。これらを踏まえて、われわれはIATSSで強調されてきた学際性を、さらに超学際的（インターディシプリナリー）に研究して社会に発信する。あるいは、少しでも社会に貢献できることを、10年後、さらにはその先を見据えて行っていく。グループ5は、このことをこのシンポジウムで皆さんにお約束します。グループとしても、私個人としても約束しましたので、10年後の50周年の際にご批判をお願い申し上げます。

キーワード

「Diversity」 「Sharing」 「Flexibility」 「Transdisciplinarity」